えくてぴあ

7
立川と語ろう　立川に生きよう
July 2006
écoutez bien Vol.24 No.260

表紙の人／土方隼斗（一番町）　写真／細江英公

MURAGOYOMI
われらの村暦
国営昭和記念公園
「こもれびの里」の1年［最終回］

写真：五来孝平

麦打ち

夏、他にさきがけて収穫できるのはジャガ芋と麦。
大麦、小麦はかつて砂川を代表する畑作物だった。
刈り取って乾かした麦をくるり棒で叩いて脱穀する。
昔ながらの麦打ちだ。
汗水たらして得られた収穫の喜びは、格別。

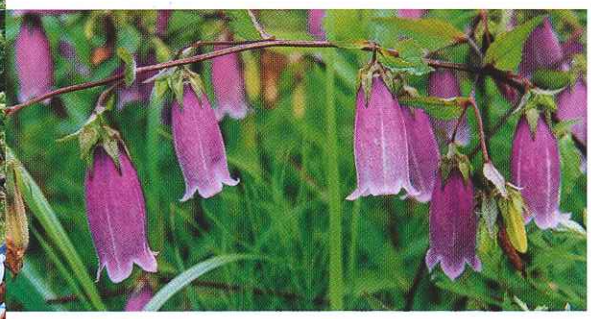
麦打ちは梅雨の晴れ間を選んで行う。麦束をシートの上に広げ、竹の柄に、割り竹やエゴの小枝を束ねたものが回るように取り付けたくるり棒で叩く。腰の入れ方にコツがあり最初はなかなか回ってくれない。

ホィ、ホィ、ホィとあいの手を入れながら唄う棒打ち唄に大勢が調子を合わせて打っていく。この麦打ち(棒打ち)は、ここ以外ではほとんど見られなくなり、棒打ち唄を伝承する人も少なくなってしまった。

棒で打つことで麦の粒が穂から外れるだけでなく、長い芒（のぎ）も取れる。昔からの知恵だ。落とした粒を集めて唐箕（とうみ）にかける。風の力で藁くずやゴミを吹き飛ばし麦の粒だけを選り分ける優れもの。

くるり棒で行う麦の脱穀は炎天下の重労働だった。今では動力脱穀機が脱穀・選別まで一緒にやってくれる。

一年間連載した「われらの村暦」はこれでひとまず最終回。こもれびの里づくりは、まだまだ続く。



栗林彩乃さん（国立市在住）
日本酒好きで各地の蔵元を回っているうちに米や土地の作物に関心を持つようになり、ここなら酒米も作れるのではないかと応募したのがきっかけ。お酒は作れないとわかりましたが、自然環境と人が交わる農業の奥深さに魅せられました。植生班で武蔵野の原風景が形になる日を夢見て活動しています。

アートへの想い かたちにしたい

於：曙町 えくてびあん編集工房　写真：五来孝平

NPO法人 立川国際芸術祭理事長
宮田 由香さん

■宮田由香（みやた・ゆか）／渋谷区生まれ。立川在住22年。中央省庁や外郭団体や大手企業の秘書を経験して結婚、出産。子育てをしながら2002年の立川国際芸術祭事務局にボランティアとして参加。2004年には実行委員長をつとめ、市民中心の国際芸術祭を目指し今年4月に設立されたNPO法人理事長に。高松町在住。

■芳賀敏博（はが・としひろ）／えくてびあん編集人

芳賀　4月にNPO法人立川国際芸術祭が正式に発足しました。1998年から2002年まで文化庁や市の支援を受けて5回開かれた後、2004年に市民のネットワークで開催。これから継続的に現代美術の国際展を核にした芸術祭を立川に定着させるために組織を作られた。この秋には2006年の国際芸術祭を予定しています。市民が中心になって国際的な現代美術展を運営していこうというのですから、すごいですね。

宮田　この1年間、とにかくNPO法人を立ち上げようとやってきました。本当は実際に国際芸術祭を組み立てていくこれからが大変なんです。もう、どうしようかって……。

芳賀　宮田さんはNPO法人化のために奔走して今回理事長になられたわけですが、いつから国際芸術祭に関わられたの？

宮田　2002年、それも途中からです。市の広報に国際芸術祭市民ボランティアの募集が載っていて、その中に小学校の「ソファペイント」というのがありました。ちょうど子どもの学校のPTA活動が週5日制の実施で大きく変わり、一度外側から学校や子どもたちのことを見てみたいと思っていたので応募したら、事務局の人手が足りないのでまずそちらを手伝ってほしいというんですね。主婦だし子どももいるからあまり積極的ではなかったんですが、海外から招聘した作家たちのスケジュール管理をしてくれないかと。それならできるかな、とやっているうちに次第に足を踏み込んでしまって……（笑）。

芳賀　2002年は文化庁の支援を受けて開かれた5回目、最後の年ですよね。僕もこの年は妙に印象に残っているんですが、ある意味でみんなが勝手に動いてまとまりがないんだけど、その分エネルギーにあふれていたというか……。

宮田　評価はいろいろだと思いますし、私も途中から加わったので全体を見ていたわけではないですが、参加した一市民としては本当に楽しかった。混乱もありましたけど、とにかく自由で、こんなかたちが見たいと思えば自分で動くしかないけれど、それができた。特に私は何も知らずに飛び込んだので、出会う人、出会うこと、みんな新鮮で……まるで子どもみたい。その中で、マケドニアの女性作家イスクラ・ディミトローヴァさんが小学生を対象にワークショップをしたんですが、個性の強い作家と時にぶつかり合いながら理解し共感していく。この時の人の出会いがもとになって2004年にイスクラさんのワークショップで国際芸術祭を開くことになり、結果としてここまで来たのかもしれませんね。

芳賀　宮田さんとしては、アートと関わるのが楽しかったの？ それとも市民活動としてひとつのお祭りを作り上げていく方が面白かったんですか？

宮田　両親が花嫁修業としてずっと油絵を習わせてくれて、少女時代は描くのが大好きでしたし、その道を目指したこともありました。でも受験用のデッサンが嫌というか、描けなくなって。その後就職したのも絵を描くために世の中を見ておこうというつもりだったんですが、結婚して、子育てをして。自分が描けないでいるというコンプレックスがずっとあったんです。芸術祭に関わってみようと思ったのも、私の中のアートとの再会というか、自分探しだったんですね。でも、ある作家が好きでその展覧会を開こうというのとも違うんです。こういう市民ボランティアに参加する人は、アートが見たいとか音楽が聴きたいというだけでなく、みんな人との関わりを求め、自分も加わって楽しい場として作り上げていきたいんだと思うんです。そういう想いがエネルギーのもとなんですね。2004年にイスクラさんがまた日本に来るというので、2002年に関わった立川の方たちに声をかけたら、本当にたくさんの方が集まってくれました。それを見て、みんな芸術祭が好きなんだ、そういうふうにしていけばこれからもできるんじゃないかと……。

芳賀　それでNPO法人化までつながっていった。

宮田　行政を含めて街の中に芸術祭をやりたいという機運があって道筋が作られたんだと思います。私は5年間の最後の年に途中から事務局をやっただけだからって声をかけていただいたのかもしれません（笑）。が、私も納得し共感できないことはしたくない方なので（笑）、やるからにはきちんとNPOの基準を満たし、行政と市民が対等な立場で協働してできるようにしたい。トップダウンではなく、自分の時間を使って来てくれるボランティアたちを含めてそれぞれの想いが大切にされ、みんなが理解し共感しながらひとつのかたちを作り上げていく。そのためのしっかりした事務局機能も必要……イメージはあっても、定款などにそういう想いを盛り込もうとすると、それは大変なんです。

芳賀　NPO法人として認証を受け、いよいよ実際にそのかたちを作っていくわけです。2006年は「face＝顔」というテーマだそうですね。

宮田　テーマと、商店街での企画、あとは横浜トリエンナーレにも参加し「似顔絵」でアートと人のつながりや出会いを誘発してきたアーティスト・黒田晃弘さんを招くことは決まっていますが、どんなかたちになっていくのかはこれからなんです。立川観光協会会長の萬田貴久さんに会長をお願いして立川国際芸術祭協働事業組織委員会を作っていただいて進めています。なにしろ、これまでにない仕組みを作り上げていくわけですから。東京都から認証をもらうときも、都庁の担当者からいよいよ最終段階というところで「本当に大丈夫？」と念を押されました。

芳賀　横浜トリエンナーレのように政令指定都市が威信をかけた日本を代表する現代美術の祭典とは違いますからね。しかし、市民中心に立川というひとつの街で開く現代美術の国際展はみんな絶対注目しますよ。2002年まで5回、質の高い現代美術展でせっかく立川の国際芸術祭として認知されかけたのに、後が続きませんでした。今度はたとえ小さくても長く続けたいですね。大変でしょうけど……。

宮田　そのためにNPO法人を立ち上げたんですからね。私一度、ある病気をして明日をも知れない命と言われたんです。幸い回復しましたけど、それまで明日も子どもたちを見ているのが当たり前だったのに、今日死ぬかも知れないと聞いて「私は子どもに何も伝えていない」と思いました。同時に「自分も何もしていない」って。それ以来あれこれ社会活動に出て良い意味で子どもとの関係が変わりました。今ちょうど下の二人が中学と高校。芸術祭ばかりでなく子育ても最後の醍醐味を味わえるように、しっかりやろうと思います。

えくてびあんの輪
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあんは
リストのお店にいつもあります
今月は 柴崎町・富士見町のお店です。

柴崎町	オリオン書房 サザン店	柴崎町3-2-1 525-3111
	とんかつ専門 かつ亀	柴崎町3-5-2 525-7647
	西武信用金庫 立川南口支店	柴崎町3-5-15 529-1311
	多摩信用金庫 立川南口支店	柴崎町3-5-22 528-2211
	りそな銀行 立川支店	柴崎町3-6-29-1F 522-4161
	オリオン書房 アレア店	柴崎町3-6-29-3F 521-2211
	ほっとすペーす 中屋	柴崎町3-6-30 522-2932
	サンカメラ	柴崎町3-7-22 522-3336
	Coffee Shop LARGO	柴崎町3-7-22-2F 525-6704
	パッケージプラザ カサイ	柴崎町3-8-7 522-8601
	手打ち ぎょうざ工房	柴崎町3-11-25 522-4770
	こむろ酒店	柴崎町3-14-3 522-2613
	喫茶 ギャラリー花	柴崎町3-14-6-1F 524-3668
	矢沢歯科眼科	柴崎町3-16-2 525-6600
	株式会社 京王ストア 立川店	柴崎町3-18-10 540-1131
	サーフショップ Waioli	柴崎町5-17-14 522-7331
	ジャガー立川	柴崎町6-15-23 524-5859
	NPO法人 東京 賢治の学校	柴崎町6-20-37 523-7112
富士見町	株式会社 浅見酒店	富士見町1-2-7 522-2823
	伊藤接骨院	富士見町1-4-29 524-7861
富士見町	ディサービスセンター Aso	富士見町1-4-29 524-7231
	井尾クリニック	富士見町1-4-29 540-3299
	スーパー 肉のハナマサ	富士見町1-18-10 548-2970
	手作りケーキの店 プティ・パニエ	富士見町1-22-30 529-8364
	西立川児童会館	富士見町1-23-6 525-0571
	さえき 西立食品館	富士見町1-23-13 529-5333
	(株)ヤマダ電機	富士見町1-24-9 526-1099
	株式会社 ダイクマ 立川店	富士見町1-24-9 526-1046
	井上レディスクリニック	富士見町1-26-9 529-0111
	中華レストラン 東華園	富士見町1-27-10 529-0458
	榎本調剤薬局	富士見町1-31-18 526-2322
	フルーツ&ベジタブル 三登屋	富士見町1-32-17 522-3021
	有料老人ホーム サンビナス立川	富士見町1-33-3 527-8866
	飯塚花店	富士見町1-33-5 522-5684
	うさぎ専門店 ラッキーラビット	富士見町2-11-7 524-6054
	一級建築士事務所 株式会社 ホーミー	富士見町2-12-3 522-2220
	Caf'e Cuisson	富士見町2-12-7 090-6935-1227
	家庭料理の店 つくし	富士見町2-12-10 526-6016
	有限会社 白洋舎	富士見町2-24-16 522-5952
	波多野米店	富士見町2-32-34 522-2884

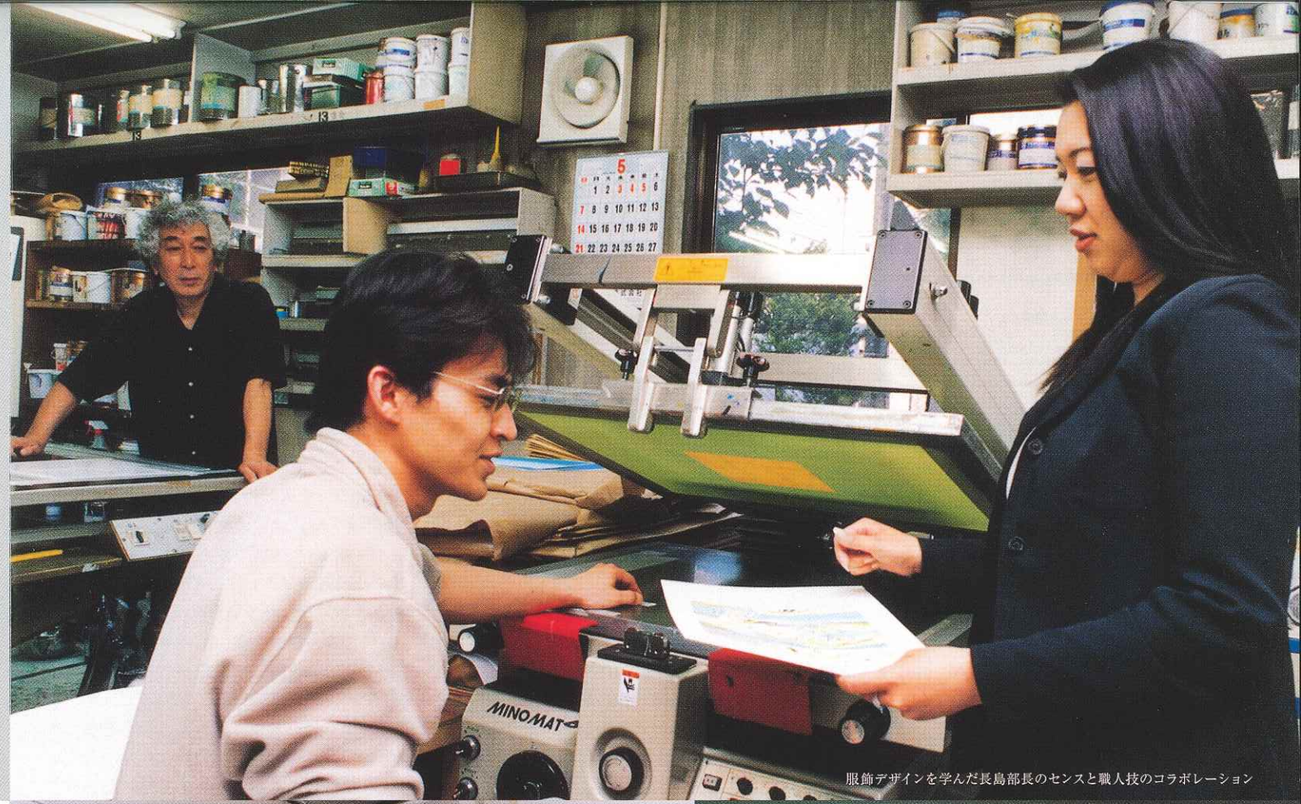
VIEW

感性を遊ばせるから「シルマージュ」

立川の会社が創る世界にひとつのシルク版画

シルクスクリーンといえば
ステッカーや野外表示の印刷に多く使われる技法だが、
立川の会社がこの技術を使って同じものが二つとない版画作品を創っている。
同じものがいくつも刷れる「版」の常識を破る逆転の発想から、
見る人の感性によって自在にイメージが広がるアートが生まれる。

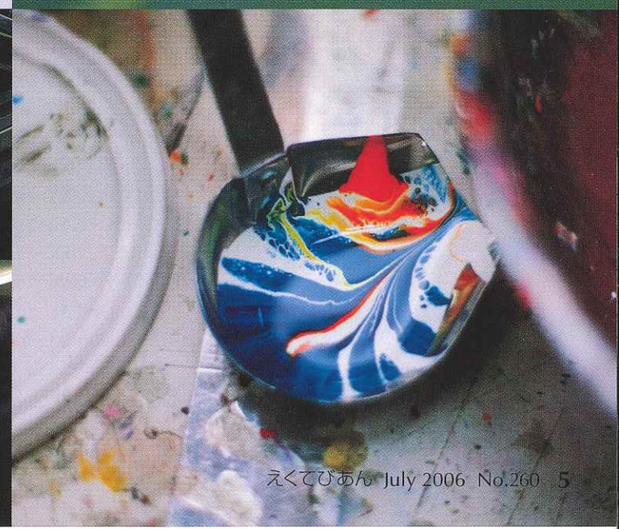
写真：小林達実



服飾デザインを学んだ長島部長のセンスと職人技のコラボレーション

色調も雰囲気も多彩な作品が生まれる

最終的な絵柄は刷り上がってみないとわからない偶然性も



シルクスクリーンは、昔懐かしい謄写版などと同じように枠に張った紗（スクリーン）にインクが通る部分と通らない部分を作り文字や絵を刷る技術。錦町にある株式会社 綜美社もふだんはシルク印刷だけでなく商業印刷全般を手がけるが、3年ほど前からオリジナルのシルク版画を始めた。

中心になっているのは、同社取締役部長の長島安岐さん。注文に応じる仕事だけでなく、シルクスクリーンを使って心の癒されるようなものができないか――納期や価格に追われるだけでなく自分たちが楽しみたいという願いでもあった。

その結果生まれたのが「シルマージュ」と名付けられたシルク版画。紗の上に「版」を作るのではなく何色かのインクをじかに乗せ、スキージと呼ばれるゴム板を動かして紙に刷る。使う色やインクを乗せる順序、スキージの速度などでさまざまな絵柄になる。

帯状の色彩が微妙に変化したり、インクを予め少し混ざった状態でたらして幻想的抽象絵画のようになったり。同じように刷っても同じものは二度と刷れない。毎回美しいとも限らない。職人さんが刷り上げたものを最終的に長島部長が判断して「作品」にする。

今年も4月に開いた画廊での展覧会や、実際に見た人の紹介で、少しずつ知られるようになってきた。穏やかな色調のものを癒しのインテリアとして飾ったり、鮮やかな色彩を朝の活力にしたり。企業の記念品や、学校の卒業記念などの大口注文も入るようになった。バッグやスカーフなどに加工することも試みている。

印刷もコンピューターでデジタル化され、どんなものでも複製できる時代。それとは正反対な究極のアナログというべきシルク版画。長島さんは「見る方が自由にイメージを遊ばせられるのがいいのかもしれませんね」――だから「シルマージュ」。

立川と多摩地域が
もっと楽しいホームページ
多摩てばこネット
http://www.tamatebako-net.ne.jp/
多摩てばこネット編集工房
〒190-0012 立川市曙町3-4-3 武藤ビル2F
tel 042-548-9606 fax 042-548-9609
e-mail message@tamatebako-net.ne.jp

常楽我浄
真如苑提供番組<じょうらくがじょう>
スカイパーフェクTV 216ch、マイ・テレビ 84ch
土　曜　午前9時～9時15分
　　午後7時15分～7時30分
再放送／火曜　午前9時～9時15分
　　午後7時45分～8時
放送時間は予告なく変更する場合がございます。
立川に育てられて七十年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel.527-0111(代)

JTB
For Your Travel & Life
世界をつなぐ旅と心
株式会社JTB法人東京　西東京支店
〒190-0012 立川市曙町2-42-1 パークアベニュー8F
営業時間：09:30～17:30（土・日・祝日休業）
組織旅行・グループ旅行・研修旅行のご相談は
TEL:042-521-5550　FAX:042-521-5558
海外・国内個人旅行のご相談は
TEL:042-521-5585　FAX:042-521-5558

私たちは「と」のための会社です。
人と人、企業と企業、企業・商店とお客さま……
いろいろなコミュニケーションがあります。
私たち大廣社は、この「と」を的確に、迅速に、効果的に、
行なっている会社です。
と
大廣社は、企画デザインから
印刷加工までを自社内で行っています。
PLANNING・DESIGNING
PROCESSING・PRINTING
株式会社 大廣社
042-527-1911
〒190-0022
東京都立川市錦町5-17-13
FAX.527-1949
E-mail info@daikousya.jp

えくてびあん流

笑顔と花のあふれる街に

シネマ通り商店会春の園芸教室

曙町と高松町にまたがるシネマ通り。立川が映画の街だったことを思い出させる名前だ。車が一台やっと通れるほどの路地の両側に数十軒の店が軒を並べる。これがシネマ通り商店会。いつも季節の花が通りを飾り、過ぎ行く人を迎え見送ってくれる。ここには、駅前や大型店とはひと味もふた味も違う立川の色がある。昔を知る人には懐かしく、若い人には新しい。人情味豊かな路地で今年も春の園芸教室が開かれた。

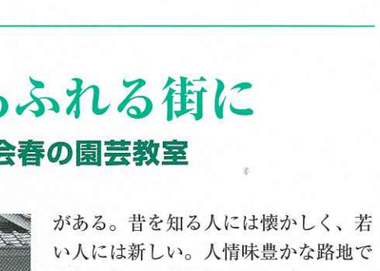
今回の教材はハーブ。雨続きの5月だったがこの日は快晴、真夏のような日差しになった。市の広報やポスターを見て集まった人は約100人。会場の天理教武蔵立川分教会の庭は、たちまちいっぱいに。ハーブの植え方の講習が終わると休憩タイム。すっきりした飲み心地のハーブティーをいただいて、続いて実習。鉢にマリーゴールド、パセリ、日本のハーブである山椒を植えて、希望者にはコスモスの苗や他のハーブの苗も。参加者には無料で教材が配られた上に、最後には空くじなしの抽選会でおみやげ付き。通りがかりの人も飛び入り参加して、誰もが楽しく得した気分。秋の講習会が待ち遠しくなった。

この人この店 ㊱

てづくり工房

ぬのあそび 慶

関口慶子さん



立川南通りが中央線の上を通る中央橋。そのたもとの青梅線踏切を富士見町側から曙町に渡るとすぐ目につく「ぬのあそび」の文字。見れば絣の袋や小物がいっぱいです。工房とお店を兼ねる小さな空間で、一つ一つ洗い張りから手作りしているのが関口慶子さん。開店して1年。古着を扱うために古物商の免許もとりました。「絣が大好き。着物をほどいているとね、きれいな着物にはない物語が見えてくるんです。作品にして生き返らせてって、話しかけてくるようです」と話すその手に、雪がすりを着たお人形が笑っています。「かわいいでしょう？　売れて行く時は寂しいけれど、ずっとお店番してるのもつらい。かわいがってもらうんだよ！って声をかけて手放すんです」と本当の子どものよう。どことなく、みんな関口さんに似てますよ。

〒190-0012
立川市曙町1-7-10
TEL 042-526-2790
営業時間 11:00～17:00
不定休

写真撮影：五来孝平

◆ タチカワ誰故草（たれゆえぐさ） ㊱ 最終回 ◆

ウ、ウ、写ルンデス

森　忠明

細江英公氏に憧れて、高校時代は写真部に所属した。部員は四人、部室はオンボロ校舎の階段下にあり、暗室もそこにあった。休み時間に現像作業をすると生徒たちのドタバタ歩きで部室全体が揺れ、どうにもならん。で、授業中、後ろのドアからそっとエスケープ、忍び足で芸術をしに行くのだった。

その時から四十年後のことし、四月七日。細江氏が館長の清里フォトアートミュージアムへ、特急かいじで向かった。第11回〈ヤング・ポートフォリオ〉のレセプションに呼ばれたのだ。八王子駅で『水戸黄門』の助さんだったか格さんだったかを演っている俳優が乗り込み、車窓には満開の桜ゆえ、私の気分は天下の副将軍。

〈ヤング・ポートフォリオ〉は、35歳以下の若い写真家を応援、優れた作品をパーマネント・コレクションとして購入し、後世に残す活動です。2005年度には38カ国から三百九十三名、五千三百三十枚の応募があり、選考の結果、68名の作品を収蔵することになったという。

永久保存証書を授与される若者たちに拍手しながら、私はかなりドーヨーしていた。彼らの写真群にあらわれた強い社会性と熱情に圧倒されてだ。シオランの断言「世界は知るに値しない」や道元の「万縁に繋縛（けばく）せらるゝことなかれ」に頷き、井蛙（せいあ）であることに居直ってきた私だが、戦場で命を賭してシャッターを押したであろう果敢な行動力、身近な事物を見占めて把捉する精神力など、多様な純粋詩的実験に、正直驚嘆させられた。更に選考委員（館長、大石芳野、英伸三）の広量と眼識には唸るほかなく、我が小隠内閉パラダイムの変換を考えざるをえなかった。

挿画：野崎義成

大阪府出身の男性が返礼スピーチで、「こんなカッコエエ施設は大阪にあらへん」。と述べたけれど、私に言わせれば「日本一俗っぽくない地点の聖なるミュージアム」だ。

訪れたのは今度で五回目。そこを運営している真如苑の、本統のパトロンシップといったものに、いつも敬意を覚える。どこを探しても真如苑のシの字も無い。本誌もシの字の仕事であり、信徒でもない私に長く書く場を与えてくれた辛抱と寛容に深謝したい。おつきあいくださった読者の方々にも。

六年前、私は『えくてびあん』表紙の人として細江巨匠の最高級写真機（ハッセルブラッド）の前に立った。被写体になると常に手のやりどころに困る私は、愛用の鞄を持ってポーズした。すると巨匠はファインダーを覗いたまま、「森さん、その鞄には何が入ってるんですか」とおっしゃった。顔が少し赤くなったはずだ。「ウ、ウ、『写ルンデス』というのが……」。

恥じていると、「ぼくも使いますよ。そっちから写し返してください」。

緊張のあまり写し返すことなど出来なかった私は、あのアクティブだった高校時代を回想、「オレも堕落したな」と呟いた。

表紙の人

土方 隼斗さん（一番町）

初ビリヤードは小学校五年生。小六の頃からジュニア大会でめきめきと力を伸ばし、中三で全日本学生選手権に最年少出場し、大学生などを抑えて優勝。高校には進まず父・均さんの経営するビリヤード場で働きながらプレイヤーの道を選んだ。昨年9月アマチュア最高峰である世界ジュニアナインボール選手権大会（オーストリア）で銀メダルに輝き、年末にはプロテストに合格してプロとして新たなスタートを切った。抜群のビリヤードセンスには定評がある。今春17歳。優しい面立ちにはまだあどけなささえ残るが、キューを構えた眼差しは、勝負師のそれだ。

幸町 ドリームショットで
写真：細江英公

かたこと

からりと晴れた初夏らしい日が少ないまま梅雨になったような今年。それでも7月から一年も後半です▼『えくてびあん』は22年前の8月創刊。7月はもうひとつの区切りでもあります▼3年間お楽しみいただいた森忠明さんのエッセイ「タチカワ誰故草」が本号で最終回を迎えました。森さん、毎回の挿絵を描いていただいた野崎義成さん、ありがとうございました▼国営昭和記念公園「こもれびの里」の一年をたどった「われらの村暦」も最終回。市民ボランティアの手で武蔵野の農家を再現するプロジェクトは一般公開に向けてさらに続きます▼8月号からはそれぞれ新企画の連載が始まります。お楽しみに▼暑い季節は涼しげな食べものがうれしい。「立川和菓子ものがたり」もおいしく好調です▼食べものと同様、心をなごませたり元気づけてくれるのがアートなどの芸術文化です。VIEWは立川の印刷会社で生まれた世界でひとつだけのシルク版画▼対談は市民の手で作る国際アート展を目指すNPO法人立川国際芸術祭の宮田由香さん。最初はどんなに小さくても、熱い思いが新たな文化を立川の街に根づかせるにちがいありません▼ともども困難にも、夏の暑さにも負けず、元気にまいりましょう。（芳）

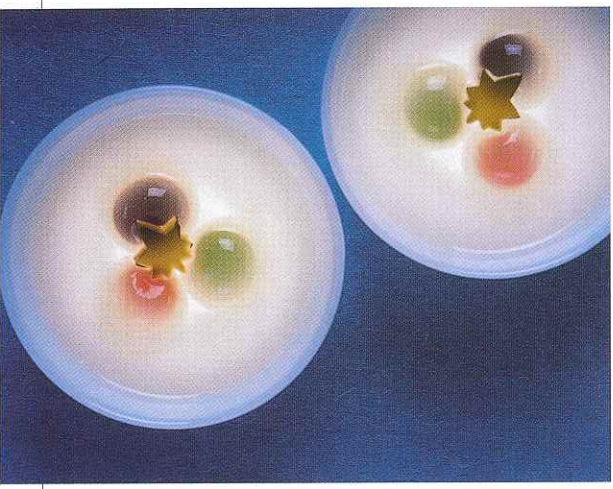
スタッフ
編集　大久保清志／清水恵美子／中薫子
デザイン　池田隆男（WATER DESIGN ASSOCIATES）
　AMNET design factory
写真　小林達実／五来孝平

えくてびあん（C）7月号
第24巻　通巻260号
平成18年7月1日発行
発行　えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL 042-528-0082　FAX 042-528-0065
編集人　芳賀敏博
発行人　加賀悦也
印刷　（株）大廣社

無断転載を禁じます。

【水まんじゅう】

たっぷりの蜜に透ける三色の玉。水面に浮かぶ青楓。目にも涼しく、つるんとした舌ざわりは体の中からやさしく冷やしてくれる。一口でいただくのがいい。弾力のある葛が割れると餡がゆっくり口の中に広がっていく。（花奴万葉庵／幸町）



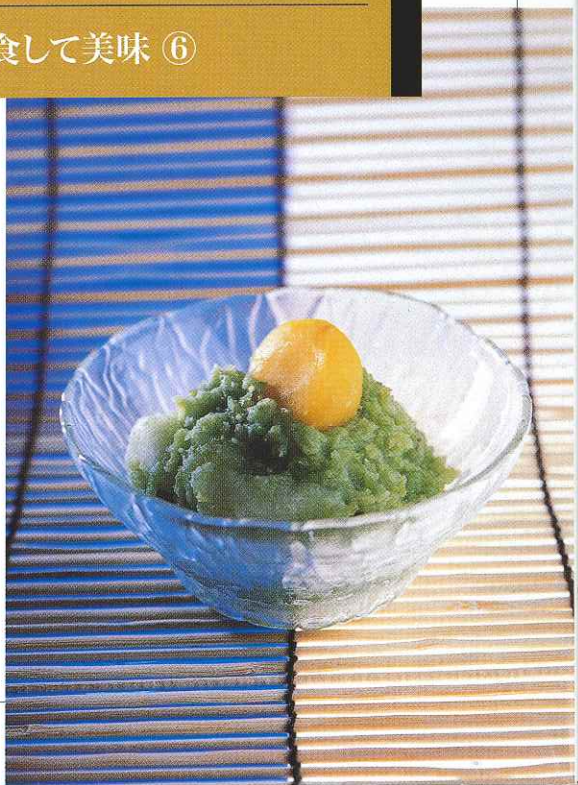
立川和菓子ものがたり

目に美しく食して美味 ⑥

【ずんだもち】

枝豆をすりつぶした緑色の餡がずんだ。やわらかいおもちにたっぷりからませていただく。おもちが固くならないので冷やしてもおいしい。ほんのり甘く、しっとりとしたずんだ。豆の青い香りがあとをひく。どこかなつかしい。

（立川伊勢屋／高松町）



写真：五来孝平